

1991年11月17日

小早川氏と氏寺を訪ねて

(経路)

8:30 9:20~9:30 9:40~10:00 10:10~10:40
福山発 — 三原城跡 — 宗光寺 — 三原民俗資料館 —

11:00~11:40 11:55~12:30 12:40~13:40
— 善根寺 — 米山寺 — 昼食(山陽モーター) —

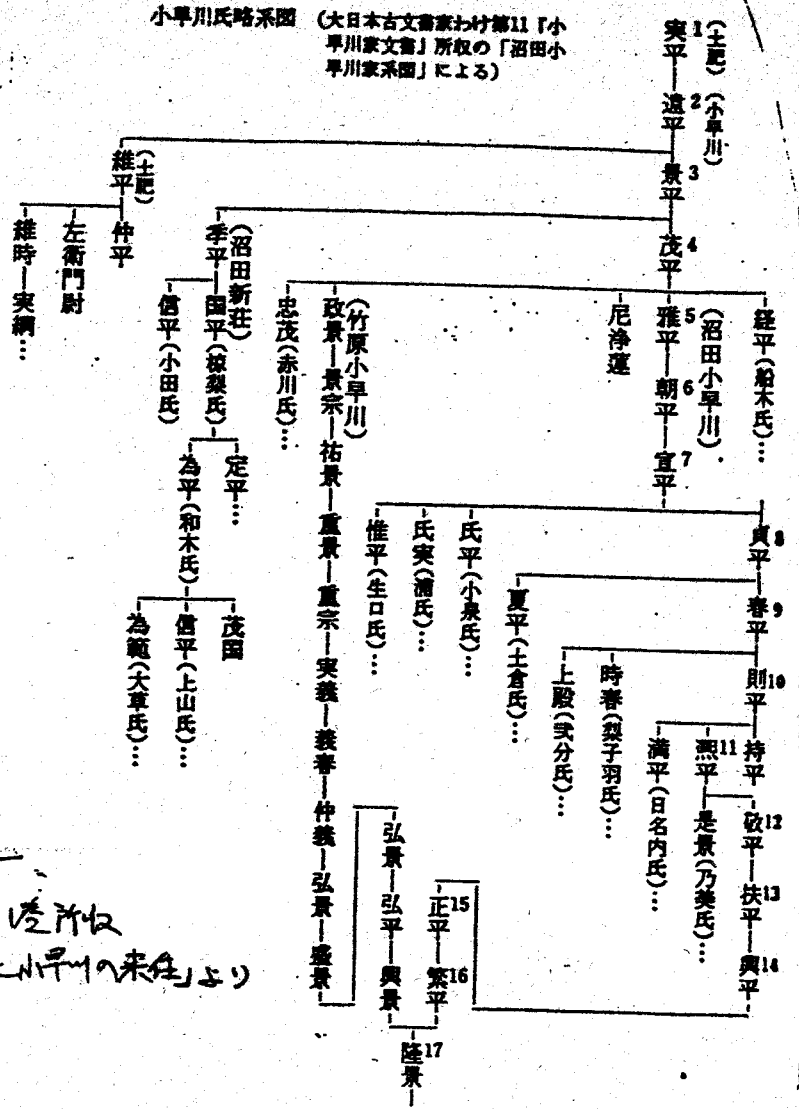
13:50~14:30 14:40~15:20 15:40~16:20 17:10
— 楽音寺 — 東漸寺 — 仏通寺 — 福山着





小早川氏略系図 (大日本古文書家会刊第11「小早川家文書」所収の「沼田小早川家系図」による)

小早川氏について



橋本敬一
 三原教第巻所収
 「沼田荘と小早川の系図」より

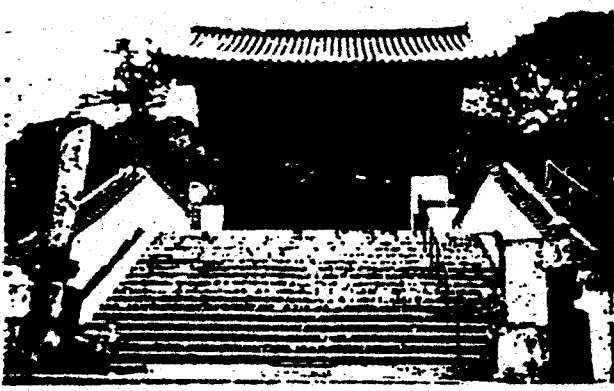
三原について

鑄物師、刀鍛冶の拠点、塩の生産地としていられていた。
 石手寺(愛媛県松山市)境内の灯籠台座銘に「安養寺奉施入
 灯籠之事、大願主僧昌徹、備後国三原之大工津守守真、嘉元
 四白丙午二月日謹記」が初見(大日本金石史)
 室町期(1456年)の造内裏段銭並国役引付には八貫二百
 八十五文……杉原千代松丸<備後国三原浦並高洲口分>とみ
 え、木梨杉原氏の一族、高洲杉原氏が三原浦を支配している。
 『兵庫入船納銭帳』にも三原の名が見える。
 毛利元就の息子小早川隆景が、永禄十年(1567)三原城
 の築城を始める。
 天正十年(1582)十二月新高山城から三原城に小早川隆
 景が移す。寺院も移す。
 近世には、広島藩家老三原浅野氏支配になる。

角川書店
 『広島県地名大百科辞典』
 橋本敬一執筆

● そうこうじ 宗光寺〈三原市〉

三原市本町にある寺。曹洞宗。山号は泰雲山。本尊は釈迦牟尼仏。天正5年小早川隆景が、両親毛利元就夫妻の年忌に際し、新高山城内に雲門山匠真寺を創建。天正年間、隆景が三原へ居城を移すとともに、真言宗万福寺があった現在地へ移転。仏殿・方丈・庫裏等の諸堂を建立し、寺領800石が与えられた（三原志稿）。『陰徳太平記』は、天正19年隆景が沼田小早川氏を相続したおり、盲目のため隠居させられた又鶴丸繁平が教真寺という山寺に入寺したとあり、これを当寺にあてる説がある。『宗光寺由来書』には寺領1,000石が与えられ、又鶴丸が入寺した一株院など7塔頭が整備されたという。慶長5年福島正則が入封すると、養山芳育を住持に迎えて曹洞宗の寺となる。正則は品治郡服部村で寺領100石と扶持米100石を与えた。また隆景の法名黄梅院殿泰雲紹閑と、同6年正則に討たれた息子正之の法名宗光寺殿天英光公から現山寺号へ改称。江戸期、浅野氏は三谿郡敷地村内の50石を寄進した。伊予国毫穂寺末で、37末寺と配下寺8をもった（以上同前）。元禄10年住持の宏淳が、『宗光寺由来書』を記した時点で一株院・泉光庵・神光寺の3塔頭が残る。境内に新高山城の本門を移したと伝える山門（国重文）がある。切妻造の四足門で、数度の補修をうけながらも、桃山期の特徴を保つ。また納所万性寺より移されたという永仁2年造立と推定される石造七重層塔や福島正之・浅野忠長夫妻の墓などがある。



曹洞宗宗光寺山門

● ぜんこんじ 善根寺〈三原市〉

三原市小坂町川西の寺屋敷あたりに所在した寺。山号は本徳山。宗派・本尊・開創由緒などは未詳。沼田小早川氏の重臣田坂右馬允義忠（稲村山城主）の祈願所であったという（芸藩通志）。江戸期、二月初午では唯一残っていた薬師堂で村内安全の祈禱や百万遍念仏を修した（国郡志書出帳）。現在、旧寺地の南約100mの収蔵庫には、善根寺旧蔵と伝える平安前期の仏像27体を納める。破損の甚だしいものもあるが、木造日光菩薩立像など6件は県重文に指定されている。

べいさんじ 米山寺〈三原市〉

三原市沼田東町納所米山にある寺。曹洞宗。山号は東廬山。本尊は華嚴釈迦如来。沼田川南の谷奥に所在し、山号はこの地の地勢が、中国の廬山に似ていることから新廬山と付し、寺号の米山は廬山の別称に因むという（三原廻）。仁平3年誓願が開創した天台宗寺院で、嘉禎元年小早川茂平が、鎌倉3代の將軍の菩提を弔うため、不断念仏堂として再興（米山寺由緒）。同4年茂平は仏舎灯油料・修理田として、沼田荘内塩入荒野の開発を認められている（小早川家文書）。延文2年小早川宣平の七男応庵祖璿が入寺中興した際、臨濟宗に改宗。中興以後6代まで小早川氏出身の住持が続き（米山寺由緒）、一族団結の拠点となる氏寺としての性格を強める。天正4年小早川隆景が堂宇を再建し、現寺号へ改称。寺領は180石でのち毛利輝元から50石の加増をうけたという（三原廻・米山寺由緒）。慶長5年毛利氏の防長移封で、福島正則が入国すると寺領を没収され、同7年火災に罹り無住寺となる。その後宗光寺を中興した養山芳育を請じて現宗派に改宗。宗光寺領100石のうち19石余を分与された。元禄年間に慈雲が復興に努め、延享4年に広島藩の援助で諸堂を修理した。往時は子院12坊を有したというが、現在では当寺南東の日光寺（旧名日光坊）のみが残る（豊田郡誌）。境内東側の丘陵上には小早川隆景の墓石（県史跡）など、沼田小早川氏の宝篋印塔20基が並び、北東隅の元応元年在銘の宝篋印塔（国重文）は、鎌倉期各地に石造物を残した石工念心の作。なお寺宝には国重文の絹本着色小早川隆景像があり、賛文は彼の塔所の京都大徳寺黄梅院主玉仲宗瑠の撰文。

P 4
がくおんじ 楽音寺〈本郷町〉

豊田郡本郷町南方にある寺。真言宗御室派。歡喜山法持院と号す。本尊は薬師如来。鎌倉初期、沼田²狂地頭として相模国より小早川（土肥）氏が入部すると、楽音寺を氏寺として在地勢力への割り込みを図り、領家方西園寺家の勢力と対抗した。このため領家・地頭双方の開創伝承が異なる。領家方は寺蔵の楽音寺縁起繪巻（県重文）の説をとる。同縁起は天慶年間頃、安芸国へ流されていた藤原倫実が、護持仏の薬師如来の靈験で藤原純友の乱を鎮圧。その功により倫実は沼田七郷を与えられ、朱雀天皇の命で護持仏を安置するため楽音寺を建立したとある。元弘3年、領家方の楽音寺院主良承の申状では、この縁起をうけて倫実一族が院主職を相伝したと主張する（曇沼寺文書／県史）。一方、地頭方は弘安11年4月12日付関東下知状案のように、天慶年間沼田本荘下司沼田氏の建立とし（楽音寺文書／県史）、以後は同荘の開発領主沼田氏の氏寺であったという。源平の争乱で沼田氏が平家方についたため所領を没収された。鎌倉初期の建永年間、小早川（土肥）遠平が地頭として入部すると同氏の氏寺となる（同前）。小早川茂平が新たに氏寺の巨真山寺（現米山寺）を建立すると、茂平の娘で梨子羽郷地頭の尼浄蓮に楽音寺の管理権が移り、徐々にその支配力が強まる。前記の関東下知状案では、浄蓮と領家方の沼田荘雑掌実厳が、楽音寺田地の事で相論しており、正応5年正月日付地頭尼浄蓮代浄円陳状によれば、楽音寺院主隆憲と争い、所職・免田の補任改易は、地頭浄蓮の処理事項であると主張しており（同前）、領家方の院主隆憲を改易している。鎌倉末期頃から山内の中台院と法持院の2院が寺務をとり、両院の下に子院の18坊があった（豊田郡誌）。応永6年竹原を本拠とした小早川仲義は、楽音寺瓦葺免田として梨子羽郷南方太郎丸名内3反を寄進しており、永享9年には小早川弘景が、結縁灌頂免田として同郷南方横枕2反を寄せるなど、室町期は竹原小早川氏の保護をうけた（楽音寺文書／県史）。天正年間小早川隆景の命で中台院は三原城下（現三原市本町）へ移された。慶長5年4月、毛利輝元は山林境内1町4反4畝、寺領100石余を寄進したが（楽音寺文書／県史）、福島正則の入国で寺領は没収され、寺基は衰退した。江戸期は本堂の費用の3分の2を郡費で、3分の1を南方・上北方・下北方・善入寺の4か村で負担し、法持院・明雲院（もと子院の下坊）その他堂宇の費用は、南方・下北方2か村が負担していた（豊田郡誌）。明治6年、無住のため一旦廃寺となるが、同20年寺号を復興し、法持院の管理で今日に至る。寺蔵の古文書58通全6巻は県重文に指定される。

とうぜんじ 東禅寺〈本郷町〉

豊田郡本郷町南方にある寺。真言宗御室派。基沼^山補陀落院と号す。本尊は十一面観音。古く史料では基沼寺とも記される。「芸藩通志」では、行基の開創とするが委細は未詳。鎌倉初期、沼田荘地頭として小早川氏が入部すると楽音寺を氏寺として、在地勢力への浸透を図る。一方、領家方西園寺家の預所橋氏や弁海名の名主源氏は、当寺を宗教上の拠点として地頭方に対抗した。正応5年、沼田荘内梨子羽郷地頭の尼浄蓮(小早川茂平娘)と領家方の楽音寺院主隆憲の相論では、楽音寺・基沼寺ともに所職・免田の補任改易権を地頭が持つと主張し隆憲を改易している(楽音寺文書/県史)。永仁5年5月浄蓮は、基沼寺院主職をめぐる正信房頼実と実道房頼賢の相論に裁判権を行使するなど(東禅寺文書/県史)、地頭の管理権を強めている。一方、領家側も暦応3年正月8日付預所橋朝臣寄進状で「基沼寺〈今者号東禅寺〉」の十一面観音の靈験あらたかなるにもかかわらず、炎上後も再興されないため、修理工所を寄進するなど寺基復興に協力している(同前)。元徳2年、梨子羽郷弁海名の名主源信成も極楽往生を願って木造四天王立像4体を寄進するなど(同像銘文/県史)、領家方の保護をうけた。室町期に入ると竹原を本拠とする小早川仲義から至徳2年「梨子羽郷南方内王子員(院)主職」を、明徳4年「基沼寺院主職継目安堵料足」を、応永6年「東禅寺権鐘免」田2反をそれぞれ寄進されている。同25年住持頼真は、楽音寺・東禅寺・一宮(三原市一宮豊田神社)学頭職を弟子頼春に譲るが、その際小早川弘景が譲状に証判を加えており、弘景のもとで楽音寺・東禅寺・一宮が密接不可分の関係にあったことがわかる。翌26年8月日付東禅寺寺領注文では、年間10石9斗余の得分のほか、吉書林代2貫9文、売田代4貫60文を有した(以上東禅寺文書/県史)。江戸後期の様子を「芸藩通志」は、今の堂宇は寛政年間の新建て、古刹ながら檀家をもたないと記す。寺蔵の中世文書18通のほか、東大史料編纂所に基沼寺文書14通が伝わ



中世文書を伝える東禅寺

ぶつつうじ 仏通寺〈三原市〉

三原市高坂町許山にある寺。臨濟宗仏通寺派大本山。山号は御許山。本尊は釈迦如来。応永4年、沼田小早川氏の当主春平が帰依した愚中周及（仏徳大通禪師）を開山に迎えて創建。寺号は愚中が中国（元朝）径山寺で嗣法した仏通禪師（即休契了）に因む（仏徳大通禪師愚中和尚年譜）。同6年から伽藍の造営が始まり、同22年仏堂立柱の際の馬注文写や同31年方丈棟上の際の馬人致注文写から、応永9年に没した春平にかわり惣領となった則平以下、一族・家人や市場商人まで参加しての諸堂建立が伝わり、小早川氏の財力を背景にした堂宇建立は30年に及ぶ。応永16年3月28日付後小松天皇繪旨では、京都五山の南禪寺と並ぶ上刹として祈願所とされた。同年8月25日には開山の愚中が入寂。2年前の同14年正月19日付で彼が弟子等へ遺した規式には、直弟子10人の評議で坊主典座を決めるよう定めている。同30年3月14日付の清唯外三名運署規式では丹波国天寧寺と仏通寺を兩本山とし、老僧4人が3年交代で輪番住持を勤め、その後住持となる6人の僧名を列記する。また同34年正月の清唯外三名運署禁制では、臨濟禪の主流を占める五山派から住持を迎えないことを決めるなど、愚中門派の勢力拡大が窺える。嘉吉元年には室町將軍家の祈願所とされ、この頃將軍の命で東寺領内における仏通寺一切経の勧進が行われた。室町後期迄愚中の門下は発展をつづけ16門派に分かれ、山内に塔頭を構え、近隣に末寺をふやしていくが、室町後期には小早川則平建立の青心院（祥雲派）、同景行建立の両足院（正覚派）、同扶平建立の正法院（大慈派）、同教平建立の長松院（常喜派）、同熙平建立の永徳院（円福派）の山内五派が交代で住持を勤めた。天文17年毛利元就が禁制を下し、永祿3年には小早川隆景が新しく寺域を定め、さらに隆景は文祿4年諸堂の再建に尽力している。創建以来、愚中とその門派を保護した小早川一族が、祖先崇拝と一族団結のため山内に近親者の塔頭を造営していく様子は、中世在地武士の信仰形態の典型とされる。慶長5年福島正則の入国で一時寺領は没収されたが、同8年に含輝院など7院・肯祥庵など12庵へ扶持方58人分・78石を与える。元和6年浅野氏は長晟が福島支配期を受けつぐ黒印状を出している（以上県史）。近世は歴代の広島藩主によって寺内の整備が行われ、明治38年現宗派を公称。県下を中心に51末寺をもつ。境内には三級滝などの景勝が多く、愚中の塔所含輝院の地藏堂は国重文。寺宝の絹本着色大通禪師像（国重文）は、春平の作で愚中の贊と伝える。

その他の寺院 (今日は見学にいかない)

①

ひらさかでら 平坂寺〈本郷町〉

豊田郡本郷町船木平坂にあった寺。真言宗系。医王山薬師院と号す。本尊は薬師如来。永仁5年正信房頼実と実道房頼賢が沼田庄内梨子羽野内の基沼寺(現東禅寺)院主職をめぐる争った時、地頭尼浄蓮は頼賢が他領の平坂寺に居住していたとして、基沼寺院主職をみとめなかった。(東禅寺文書/県史)。これより永仁5年以前に平坂寺が成立していたことがわかる。正和3年5月、南方楽音寺が中心となって執行した一宮神社(現三原市、一宮豊田神社)の修正会では、初夜勤行の導師と守護人3人のうちの1人を平坂寺が務めており(基沼寺文書/県史)、沼田荘地頭小早川氏の保護をうけた楽音寺・基沼寺とも深いつながりを持っていたと思われる。「三原志稿」によると、小早川隆景の母の祈願所とあり、隆景が三原城を整備した時、正法寺(三原市本町)とともに郭内山の手町に移され、福島正則が侍屋敷を増築した慶長年間に再度移転したが、後無住になり廃寺となる。

②

えいふくじ 永福寺〈本郷町〉

豊田郡本郷町船木亀津原にある寺。臨済宗妙心寺派。山号は蓮華山。本尊は阿弥陀如来。「芸藩通志」は、建長~康元年間頃、小早川(土肥)茂平と威徳上人が開創し、京都東福寺4世の白雲慧暁(仏照禅師)を開山に迎えたと記す。一説には古く天台宗寺院で、茂平の菩提寺であったともいう(豊田郡誌)。応安年間までに、室町幕府の保護をうける官寺である諸山位の寺格をうけ(友山録)、康暦元年には天関瑞冲が中興した。この頃の住持に、小早川則平の弟で東福寺住持にも昇住した琴江令薫がいる。(琴江和尚語録)。現在、世羅町永寿寺所蔵の大般若経393帖(県重文)は、永和3~5年の書写で、永正~永禄年間頃は永福寺の所蔵であった。同経の紙背文書によれば、天文13~16年に庫裏や方丈が再建され、本尊や開山像など諸仏も施入されている。正徳3年の火災で、寄付状等の記録類を焼失(豊田郡誌)。かつては12院を数えた塔頭も、幽堆院薬師堂が残るのみ。明治31年矢原の地藏堂を合併して今日に至る。寺宝には絹本着色仏涅槃図(県重文)がある。

P2 ~ P7は 角川書店『広島県地名大百科辞典』

堤執筆項目

③

せいしんじ 棲真寺〈大和町〉

賀茂郡大和町平坂にある寺。臨済宗妙心寺派。山号は応海山。本尊は千手観音。古くは応海寺とも称した。寺蔵の応海山棲真禪寺記（延宝5年作）によると、建保4年源頼朝の娘で、土肥（小早川）遠平に嫁いだ天窓妙仏が早世。彼女の菩提を弔うため、承久元年遠平の父実平が創建。のち遠平が諸堂を建立したとあるが、小早川家系図（小早川家文書／大日古）では妙仏を遠平の妹とする。また前記の寺記は、妙仏の母梅岳寿庵尼も棲真寺に住し、弘安2年仏照が中興開山として入寺したとある。仏照は京都東福寺4世の白雲慧暎の禪師号で、このころ臨済宗東福寺末の寺となったと思われる。建長4年11月日付安芸沼田本荘方正檢注目錄写には、10町3反の神仏田のうち3町が応海寺仏性灯油田とされ、永享2年12月日付和木範平知行分注進状写では、和木村の半分を寺領としている。また寛正2年7月26日付幕府奉行連署奉書写では「東福寺栗棘庵末寺安芸国栖真寺領百姓兄弟」が濫妨狼藉を働いたことがみえる（同前）。江戸初期の寛文2年仲芳が堂宇を修造、京都妙心寺末へ転じた（芸藩通志）。寺宝として二十八部衆立像中の13体（県重文）を所蔵する。像高50cmほどの小像だが、玉眼で彩色を施した鎌倉期の作。なお境内北方の定ヶ原には、安貞2年に没したという寿庵尼の墓と伝える宝篋印塔があり、県史跡。



臨済宗棲真寺

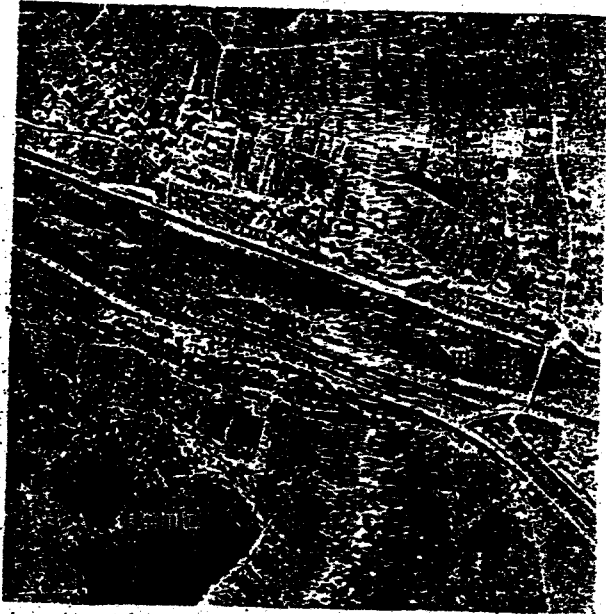
角川、前掲書、松井輝昭
執筆項目

三原市史 第1巻附収中子

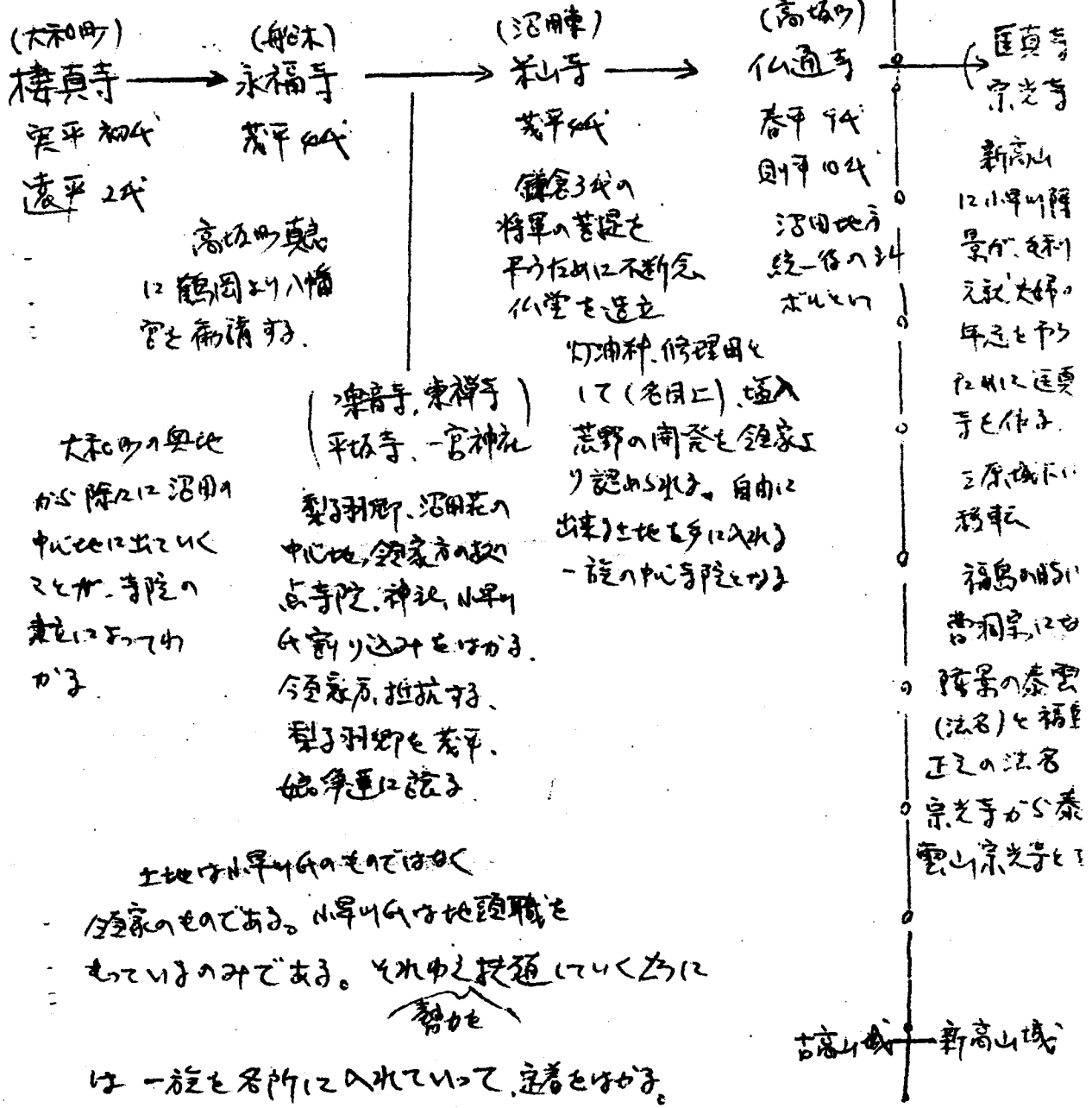
三原市史 (四史跡) 左 新高山 右 古高山



沼田川をたまたんで中央部北側に新市、沼田川本町



見学のポイント





編集 備陽史探訪の会事務局

〒720 広島県 福山市 多治米町 5-19-8

☎(0849)53-6157
